



No.210

ティーブレイク

Tea Break

肥満に関する今昔物語

会員 正林 真之

今はもう、既にかかなりの昔のこととなってしまったが、かつて「自分の年齢の分だけ懸垂ができる時期」というものがあつた。つまり、18歳なら18歳で、18回の懸垂ができた、そういうことである。もちろん、今はもう、太ってしまったことに加え、筋力も落ちてしまったので、見る影もない。

確かに凄く若い頃は、自分は決して太らないものだと思つていた。どうやったら太れるのか、それを不思議に思うことすらあつた。けれどもそれは、やはり、20代までのことである。

それが30代に突入すると、体重はどんどん増えていく。運動もしなくなる一方で、食べる量は減らない。減らないどころか、むしろ逆に、貧しかった学生や新社会人の頃を忘れたかのように、量をとるようになる。しかも、その頃と比べると、少し高級なカロリーの高い食事を口にするようになる。むろん、基礎代謝量は減るばかりであり、それに伴ってカロリーの消費量も減る。なので、これで太らないほうがおかしい。

けれども、太り始めた当初の頃は、まあ、ちょっと食べる量を減らして運動をちょこっとすれば直ぐに戻るなどと嘘ぶいて、そのままにしておくものだから、決して体重は減ることが無い。むしろ、単調増加の一途をたどる。そうして、ある時にふと「なんで俺は太ってしまったのだらう?!」と思う。それはもちろん、体重の単調増加がある数値を超え、これはもう元に戻すのは難しいなと、そう自覚できたタイミングである。

しかしながら、「なぜ太ってしまったのだらう?!」と思つているうちは、まだいい。そのうちに、太っている期間が長くなり、太っている状態に慣れてきてしまうと、今度は「何で俺は以前は痩せていたんだらう?!」と思つてしまう始末である。それはちょうど、中島敦の山

月記か何かで、トラに変身してしまった主人公の男が「なんで俺はトラになってしまったんだらう?!」と思つていたものが、いつの間にか「何で俺は以前は人間だったのだらう?!」と思つてしまつている自分に気が付いて、底知れぬ恐怖を味わつた状況と似ている。

むろん、トラになつたのであればともかく、太つたくらいで恐怖を感じることはないが、高校の頃に山月記を国語の授業の中で読んだときには何も感じなかつたことが、「あれは、こういう感覚だつたのか」と、何やら少しわかつてしまうところが、何とも情けない。ただ、健康に対する潜在的な恐怖というものがあるので、今度は何かとダイエットに励んだりすることになる。

ところが、ダイエットに励んだことのある同類の方なら直ぐに分かると思うが、その殆どは徒勞に終わる。そうすると今度は、自分が太つてしまつている正当な理由を探さうになる。それは例えば、遺伝子の中に太る機能があるものが存在するとか、腸内細菌のフローラが既にデブ(すみません。自分もデブなので、他意はありません。)のそれになつているとか、そういったことである。まあ、だから自分はデブでも仕方がないと、痩せるための努力を止める言い訳にするわけである。こうしてデブの多くは、あきらめの境地の悟りを開いていくわけである。まあ、この時期になるとデブも堂に入り、子供達から「パパのお腹には何が入つているの?!」などと聞かれると、「夢と希望(脂肪?!)が入つているんだ」などと平気で答えたりするようになるのである。

ところで、「パンドラの箱」という有名な話があつて、決して開けてはいけなかつたとされている壺の蓋を開けてしまい、この世の全ての災厄をまき散らしたパンドラが、それに気付いて急いで蓋を閉めたところ、「希望」が壺の中に残つたということである。そしてまた、希望とい

うものは、プライドなんかと同じで、自ら捨ててしまわない限り、勝手に無くなったり、ましてや人に奪われたりしないものである。

では、デブについてのあきらめの境地に至った我々は一体どうなるのか。もうその答えは分かっているだろう。そう、ダイエット用品や痩せる手法に関する特許出

願の相談が来ると、何やらワクワクして発明者との面談に臨んだりする。既にあきらめの境地に至ったとはいえ、まだまだ完全に希望を捨て去るまでには至っていないようで、今日もまた、自分が弁理士にいるうちに、もっと楽に痩せられる方法が発明されないものかと、心待ちにしているのである。